開会あいさつ

放送教育開発センター所長　　加　藤　秀　俊

進行役（放送教育開発センター研究協力課長　西岡正徳）　ただ今より「マルチメディアと高等教育」を主テーマに『放送教育開発センター研究シンポジウム1991』を開催いたします。最初に、放送教育開発センター加藤秀俊所長よりご挨拶を申し上げます。

加藤秀俊　例年当センターでは、『大学放送教育研究シンポジウム』という研究集会を続けて参りました。放送教育開発センターの設置目的からしましても、放送教育というのが主眼になるわけでございます。それを疎かにしているわけではございませんが、今年はお手元の資料からもおわかりのように『放送教育開発センター研究シンポジウム1991』というタイトルがついております。これには多少深い意味がございまして、放送教育というのは、非常に大事な領域でございますし、我々と姉妹関係にあります放送大学との共同作業を常に進めている立場からしますと、当然放送というのは主眼になるわけでございますし、全国13大学での公開講座も放送という手段を使って行っております。しかし、このセンターが発足しましてから13年の歳月の間に、放送という通信手段以外の通信手段の発達が極めて著しかったことは、皆様ご存じのとおりでございます。様々な電気通信、例えば地上回線を使う方法もございますし、光通信もございますし、通信衛星の利用も進んで来ました。そうした様々な新しい電気通信の分野が開けてきたことに注目したいと思います。したがって放送という特定の通信形態にこだわる事なく、もう少し広い立場からメディアの問題を考えてみようというのが今回のシンポジウムの主旨でございます。

そこで、今日はこれらの通信手段を使って第一セッションが進行いたしますが、通信衛星と大学や研究機関は、どういう関係にあるのか考えてみますと、衛星通信による学術的な交流といったようなことは、様々な分野で必要になって来ておりますし、部分的には実行に移されております。例えば遠隔学習でございますが、このセンターでは、若松教授を中心といたしまして非常に初期の段階から双方向の通信の可能性の研究が進めてられてきました。流しっぱなしではなくて、双方向の通信がどうにかして出来ないか。電話回線を使ったこともありますし、通信衛星を使ったこともあります。それから、こうした実験は将来通信制の大学院或いは通信制の継続教育、リカレント教育といったような領域にも大いに役に立つでしょう。それから、これから開始される第一セッションでご覧いただけるように、遠隔地での共同研究にも役立ちますでしょう。或いは、放送大学が全国化された時に、どのようにお使いになるかは、放送大学のご判断でございますが、私が一部の方から伺っている限りでは、全国化した段階でも学生への面接代替授業とか、北海道から沖縄までの各学習センターのセンター所長会議とか、或いは事務連絡とか、諸々広域にわたった研究、教育そして管理、行政の実務、そうしたところにも恐らくこの衛星通信の教育利用は、分野が広がっていくに違いありません。現に大きな企業では、既に専用回線をお持ちになっておられて、全国の本店と支店とを結んでおられるようで

す。私共大学教育或いは高等教育に携わり、或いはそれを研究対象にしている人間にとって、こうした新しい通信手段というのは極めて重要な意味を持つというわけでございます。大変前置きが長くなりましたが、そうしたことを踏まえまして『放送教育開発センター研究シンポジウム1991』ということで今日のタイトルどおりのシンポジウムをこれから開催させていただきます。

第一部、第二部と分かれております。第一部に関して一言解説をしておきますと、これは二重の意味がございます。一つは、私共のセンターでこの１年半に特別講演会を開催いたしました。これはいわゆる大学公開講座の一種でございまして、センターの研究者が合計13回にわたり、東京の銀座の日産ギャラリーという所で小さいながらも大学公開講座というのをやって参りました。その特別講演会の第14回目というふうに理解していただいていい節目でもございます。まだ未熟な所は補って行かなければいけないわけですが、この特別講演会シリーズの延長という意味が第一セッションにはございます。

第二は、昨年既に一回目の実験を行いまして、かなりの成功と成果を収めたと思いますが、大阪の国立民族学博物館のご協力をいただいたというよりも、一緒にやりましょうというような気分にお互いになりまして、大阪の千里丘陵とこの幕張の放送教育開発センターの二つを結んでの共同研究の第二回目という意味を持っております。残念ながらこの回線は常時つながっているわけでございませんので、この時だけしか使えないという段階でございますが、将来はだんだん固定局に持って行って、東京と大阪のみならず日本全国に衛星通信のネットワークを広げながら、共同研究が出来るのではないかという実験的意味も含めた、東西協同研究の発表でございます。

午後の第二セッションでございますが、こちらのほうは、私共放送教育開発センターが与えられております使命というのは、中世まで逆上ることが出来る高等教育という領域と様々なメディアと、この二つをどのようにつなげるかということでございます。おもしろいことにこの二つは、いずれも専門というものがない学問領域です。メディア論と申しましても、日本には新聞学の伝統というのが明治の終わりからございますが、メディア論というのは大変新しい領域なのです。専門家がいるわけではありません。いませんというと失礼になりますが、機械工学の側でのメディアの技術者と、社会システムとしてのメディアの問題を考え始めた研究者というのは、我々の世代には少なくともあまり多くはいないようでございます。それから、高等教育の方でございますが、私自身がここ２～３年、この放送教育開発センターで仕事するようになりましてから、教育学とはそもそもどのようにして生まれて来たのかといったようなことを調べてみますと、西洋ではジャン・ジャック・ルソーから始まりまして、フレーベルとか、まあいろいろな人が出て参りますが、大体これは初等中等の教育といいますか、子供をどう扱うかというのが教育学の根幹をなしていたようでございます。一方、高等教育論というのも教育学の中では決して異端とは申しませんが、全く新しい領域の研究対象であるようでございます。要するに専門家がこちらもあまり多くはない、専門家が多くないということは、アマチュアばかりということでございます。しかし、アマチュアばかりということは、頼り無いように見えますが、実はこれ程心強いことはないのでございまして、２つのアマチュア学問領域がこれからどうやって融合を遂げて行くかというのが私共に与えられた使命であろうかと思ってお

ります。それらが第二部の「マルチメディアと高等教育」という事に結集しているわけでございます。今日のすべてのプログラムは、後で司会をされます樺山教授が企画実行委員長になられましてお進めいただいたわけですが、既に画面の上でご覧いただいておりますように、大阪のほうでは国立民族学博物館の石毛教授がカウンターパートとして、画面後ろに出ております。石毛さんおはようございます。

石毛　大阪も全員そろっております。

加藤　どうもありがとうございました。これはけっして放送ではありません。これを見ているのは、ここにいる人間だけでありまして、大阪の方も見学者が何人かいらっしゃるかもしれませんが、同じ部屋の中で、ただ遠い所から絵だけ送られてくる。こういう経験をこれから我々はどんどんやって行くことになるかと思います。第一部はそんなふうに展開して参ります。石毛さん、今日はいろいろお世話になりますので、よろしくお願いします。

石毛　こちらこそよろしく。

加藤　それでは、これから第一部の方に入ります。司会は先程申し上げました、樺山教授にお願いいたします。